

発達障害児を持つ母親への支援に関する一考察

中 村 彩 香 池 田 由 紀 江

One consideration about the support to mothers who have children with developmental disorders

Ayaka Nakamura, Yukie Ikeda

抄 録

本研究では発達障害児を持つ母親が育児不安や育児ストレスをいつ、どのように感じ、またどのような支援を必要としているのか検討することを目的とした。

発達障害を持つ母親への調査の結果、母親が「子育ての上で助けられた人」と認知しているのは、専門機関よりも家族や友人であった。しかし、母親自身の養育行動の振り返り等では、専門機関を必要としていることがわかった。このため、母親に対して身近な家族は母親の精神面でのサポートを行うこと、そして専門機関では母親に適切な情報を伝えること、また家族機能も含めた包括的な支援が必要とされていることが明らかとなり、これらが母親のストレスの軽減につながると考えた。また、専門機関へ通うことには多少の抵抗が見られたため、子育て支援センターや保育園、幼稚園など、地域に密着した支援環境が望ましいと考察された。

キーワード：発達障害児

育児不安

育児ストレス

支援

地域資源

1. はじめに

わが国において、平成16年12月に「発達障害者支援法」が成立した。この法律による「発達障害者」とは、発達障害を有するために日常生活または社会生活に制限を受ける者をいい、「発達障害児」とは、発達障害者のうち18歳未満の者をいうものと定められている。

発達障害者支援法が成立した背景には、これまで法制度の支援対象から外れていた知的障害を持たない者や、軽度の知的障害のある発達障害者に対して、支援の取り組みが必要であることが明らかになったことが考えられる(齋藤、2006)。この法律における「発達障害」とは、「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するものとして政令で定めるもの(発達障害者支援法第2条第1項)」とされている。この法律の第5条では健康診査の実施など、発達障害の早期発見のための必要施策を講じており、わが国では母子保健法に基づき、すでに1977年より導入されている各市町村においての1歳6ヵ月健診が発達障害児の早期発見につながっている。この1歳6ヵ月健診で、発達障害が直ちに疑われるわけではないが、発達の見守り確認が必要であろうと思われる子どもが多く発見されている。1歳6ヵ月健診後のフォローとして、自治体独自で発達相談員による発達相談を実施するところが増え、早期に発達障害児を発見し、早期療育へと支援する体制が整いつつある。発達上の障害を持つ子どもが、早期に療育を受けられる体制が整い、発見から療育へのルートが整備されている地域は多くなっている。しかし、支援する場が乏しいのが現状である(庄司、2007)。第6条では早期の発達支援を保障し、発達障害児が早期に発達支援を受けることが出来るよう、発達障害児の保護者に対し、その相談に応じ、センター等の紹介、助言など適切な処置を行うものとされている。発達障害において早期からの介入を行えば、発達に良好な影響があることは、多くの研究から実証されている。このように、発達障害者支援法には、児童の支援に関する規定だけでなく、親への支援についても規定されている。

近年の研究においては、現代の子育てには育児不安が強いという結果が多い(庄司、2007)。母親が育てにくいと感じている子どもの多くは、のちに発達障害児と診断されることが多く、実際に、保健師が1歳6ヵ月健診の際に発達上の問題を持っていると評価した子どもを持つ母親が集う育児支援グループ(以下、育児支援G)の母親と、一般の育児支援グループ(以下、一般G)に属する母親との育児ストレスには有意な差が見られている(庄司、2007)。また、この“育てにくさ”から、どのように子どもに接したらよいのか分からず、育児不安に陥り、虐待につながる可能性が高いことも指摘されている(中根、2007)。Rogers(1996)によると、発達に障害を持つ子どもの家族にとって早期療育の機会は、育児不安の軽減と、育児の指針の契機となり、有効な支援となりうることは多くの臨床家によって実証されてきたという。その時々、母親の気持ちに寄

り添った支援を早期に、継続して行っていくことが望まれている。

これらのことから、発達障害を持つ子どもは育てにくいゆえに、一般の母親に比べ、育児不安や育児ストレスが高くなることは明らかである。早期介入が発達障害児を持つ母親のストレス軽減につながり、そこから生じる関心の高まりが、子どもの早期療育を可能にし、子どもの持つ可能性を伸ばすと考えられる。その際の医師・保健師・発達相談員などの専門家からの介入は非常に重要な役割が期待できる。

本研究では、発達障害児を持つ母親が子どもの育児不安や育児ストレスをいつ、どのように感じ、またどのような支援を必要としているかを明らかにすることを目的とする。

2. 方法

①調査対象

調査対象は、A県にある発達障害児関連施設に通う「発達障害」と診断された子どもの母親4名。

②手続き

調査の依頼は直接説明を行い、承諾を得たうえで実施し、回答は1名の郵送による回収を除き、直接回収した。

③調査期間

平成20年9月中旬～10月中旬

④倫理的配慮

ご協力いただいた母親が特定できないよう、無記名でアンケートを行った。なお、返信されたアンケートにはIDナンバーをつけ、管理を行った。

3. 結果・考察

(1) 育児不安・育児ストレス

発達障害児を持つ母親は一般の母親に比べ、子育てをしていく中での不安やジレンマが強いのではないだろうかと仮定し調査を行った。庄司(2007)の研究によると、一般の母親が集う育児支援グループと発達障害児の母親が集う育児支援グループにおける調査の結果、発達障害児の母親のほうが育児ストレスが高いことに有意差が認められたという。本研究における調査からも同様に、どの母親も発達障害児の子育てに多大な不安やジレンマを抱えていることが明らかとなった。特に強い不安の要因としては、「子どもに対してどのように接したらよいかかわからない」「子どもへのかかわりが、本当に子どものためになっているのかかわらなくなる」などの記述が見られた。これらは母親自身の養育行動の悩みが主であり、「自分のかかわりが時に子ども

の可能性をつぶしてしまっているのではないか」などジレンマや自責の念にかられている様子がうかがえた。

(2) 母親の支え

子育てをしていく中で、母親が『助けられた』、『いてよかった』と認知している人は「夫・実母・友人」であった。「保育士・教師・療育関係者」また「似たような子どもを育てているママ友達」も挙げられていることから、身近にいる家族や友人、専門的に支援してくれる他者が、子育てをしていく上での支えとなっていることが考えられる。ママ友達が挙げた点については、石本ら (2008) による、親が子どもの障害を受容していく過程においては、親の会や療育機関で同じような障害を持つ子どもの親とのつながりを作ることが重要であるという点と一致している。これらから、子育ての上で母親が有用であると認知しているソーシャルサポートは専門機関ではなく、家族や共通の問題を持つ友人であることが明らかとなった。しかし石本らは、子育ての上で母親が有用であると認知しているソーシャルサポートの標準偏差に着目した場合、「夫の両親」「私の両親」「子どもの兄弟」は比較的大きな値となっているが、このことは家族におけるサポートを利用できている人と、利用できていない人がいることを示すものであり、一律に有用と認知されているわけではないと指摘している。また、ソーシャルサポートには道具的サポートと情緒的サポートがある (浦、1992) とされるが、専門機関では道具的サポートが、友人や家族からは情緒的サポートが得られると考えられているという。小坂 (2004) の研究は、一般幼児の親を対象としたものであるが、情緒的サポートのみが親としての態度満足感や子どもとの関係満足感を高めることが示されている。本研究における発達障害児を持つ親も同様に、情緒的サポートを得られることを助けになると認知しており、これらのことから母親が情緒的サポートを必要としており、身近な人の存在が母親の助けになっていることが読み取れる。

(3) 専門機関の必要性

調査の結果から「発達に遅れのある子どもと母親が通える施設や病院が少ないため、受診する期間の間隔が長くなってしまい、次に受診するまでの間に、子育てに対しての不安が募ってしまうのが現状。身近に養育者の心もケアしてくれるところがあれば心強い」「子どもにどう接したらよいかわからないときに、相談できアドバイスをもらえる と 解決したりよい方向に向かうのでうれしいし、安心する。近くに相談できる場所があることは、親にとって本当に助かる」「相談できる人、助けてくれる人がいなかったら生きてこれなかったように思う」など、発達障害の子どもと向き合う母親が試行錯誤して子育てをしていることがわかる。また、「あまりよく寝てくれない」「他の子どもと比べると言葉が少ないように感じる」など乳児期から不安を感じている。これらは主に母子関係の不安であるが、幼稚園・保育園に入園する幼児期

になるにつれ、集団生活への不適応など徐々に他者との関係に関する不安へと移行していく様子が見受けられた。この不安が解決できなかつたり、子どもの様子に気づかないまま過ごしていくと、子どもにとって不適切なかかわりをする事となり、子どもの本来持っている可能性を見失ってしまう恐れがある。発達障害児を持つ母親は子どもへのかかわりに不安を感じ、子どもへの対応が本当によかったのか、子どもの行動への理解も完全でなく、いくつもの不安を抱え、それを毎日繰り返すことに負担を感じている。

子どもとのかかわりに戸惑いながら、子どもを思い懸命に子育てをするにもかかわらず、親子間で意志の疎通などの相互作用に困難を来し、再び思い悩んでいる母親の姿が容易に想像できる。子どもにとってよい親であろうとする反面、相互作用の困難により親の気持ちが伝わらず、それらが重なることで献身的に子どもと向き合うことが阻まれ、母親自身が自己嫌悪に陥ってしまうという悪循環が生じていることが考えられる。これらは早期に障害が発見されても、子ども・母親ともに支援する場が乏しいことも影響しているであろう。

庄司（2007）の研究から明らかになっているように、母親が「ご飯を食べない」「言うことを聞かない」などの悩みを感じる段階や、集団生活のなかで母親が他児との違いを顕著に感じ始める幼稚園・保育園の入園してからの段階で支援が必要だと考える。不安は日ごと、年齢ごとにも異なる。中田（1995）は、自閉群や知的障害群について、親は子どもの発達につれて生じるさまざまな出来事に遭遇するたびに、否定と肯定の入り交じった感情の繰り返しを経験せざるを得ないとしている。

以上を踏まえた上で、発達障害児を持つ母親の子育てをサポートする場合、具体的に支援者が、子どもの行動を理解できずにいる母親に「なぜこのような行動に至ったか」など子どもの言動について説明し理解を促すこと、次に、親の対応へのフィードバックを行うことで、不安・ストレスの軽減が図れるのではないかと推察する。家族など身近な資源を活用したサポートを検討し、調整していくことが必要ではないだろうか。

本調査においても、母親にとっては専門機関からの助言と同じく、同じ子育てをしている友人や家族といった身近な人からのサポートが有用であると認知されていることが明らかとなった。その一方で、専門機関からのサポートや助言が母親の障害受容を促し、不安やストレスの軽減につながることも示唆されている。このことから、身近に感じる家族的な機能と、専門的な機能の両機能を担う機関の存在が最も有効であると考えられる。

どの母親からも「子育て支援センターが早くあればよかった」という意見が見られたことから、子育て支援センターは自由に入出りできる空間であり、抵抗なく通えるところと認識されていることが読み取れる。また、保育士や教師に助けられたと認知している母親もあり、子育て支援センターや保育園、幼稚園など、地域に根ざしている機関には、母親の心理的抵抗が少なく、通いやすいとの認識を持っていることが想像できる。

実際、通常の保育園、幼稚園に入園を希望する親が多く、統合保育を行っている保育園・幼稚園が増えており、そこで悩みを打ち明ける母親も多い。そのため、発達障害児を持つ母親へのサポート手段や場としても有効性が高いと考えられる。

また、母親が家族などの身近なサポートを有用だと認知していることから、その家族が適切な知識を持ち、円滑に家族生活を営んでいなければ、誤った養育をしかねない。これらの回避を可能とし、家族的機能、専門的機能を担い、専門的知識を持って、育児・家庭への包括的なサポートを行う機関としては、最も身近な子育て支援センターなどの地域資源を活用していくことが有効だと考えられる。

子育て支援センターや保育園や幼稚園などの地域に密着した機関で、療育や母親のケアの充実をはかることで、母親にとって望まれる家族的、専門的サポートの両機能を備えた“身近な専門家”として、利用しやすい環境が整うのではないだろうか。

5. 課題

今回の研究においては、サンプルの少なさの問題やサンプルの偏りが見られた。今後、研究方法、収集方法をより工夫していくことで、正確なデータの整理を行う必要がある。

6. 謝辞

今回の研究に快くご協力くださいました4名のお母様方、またご助言・ご協力くださいました先生方に心より感謝申し上げます。

参考文献・引用文献

- 1) 石本雄真他 (2008) 「障害児をもつ母親の障害受容に関連する要因の検討—母親からの認知、母親の経験を中心として—」神戸大学大学院紀要発達環境学研究科研究紀要第1巻第2号：pp. 29～35.
- 2) 伊奈登美子他 (2007) 「軽度発達障害児をもつ母親の障害受容過程と学校における心理的支援」愛知教育大学教育実践総合センター紀要 第10号：pp. 7～14.
- 3) 浦光博 (1992) 「支えあう人と人 ソーシャルサポートの社会心理学」サイエンス社
- 4) 小坂千秋 (2004) 「幼児を持つ母親の親役割満足感を規定する要因—就労形態からの検討—」発達障害研究 第18号：pp. 79～87
- 5) 齋藤知子 (2006) 「要保護児童における発達障害の問題について」子ども虐待とネグレクト 第8巻第1号：pp. 33～50.
- 6) 庄司妃佐 (2007) 「軽度発達障害が早期に疑われる子どもをもつ親の育児不安調査」発達障害研究 第29巻第5号：pp. 349～358.
- 7) 杉山登志郎 (1998) 「自閉症に対する早期療育の有効性および愛着形成との関連に関する研究」平成8年度～平成9年度科学研究費補助金(基盤研究C2)研究成果報告書
- 8) 中田洋二郎 (1995) 「親の障害の認識と受容に関する考察—受容の段階説と慢性的悲哀—」早稲田心理

学年報 第27号：pp.83～92

- 9) 永田雅子他 (2008) 「地域における広汎性発達障害児と親への早期介入の試み—親の育児支援における効果の検討—」 小児の精神と神経 第48巻第2号：pp.143～149.
- 10) 中根成寿 (2007) 「障害は虐待のリスクか?～児童虐待と発達障害の関係について～」 福祉社会研究 第8号：pp.3949.
- 11) Rogers S (1996) 「Brief report : Early intervention in Autism」 Journal of Autism and Developmental Disorders 26：243～246
- 12) 厚生労働省 (2004) 「発達障害者支援法」

Abstract

This study focused on mothers who have children with developmental disorders. It is examined when and how these mothers feel stress or anxiety and what kind of support they need.

The result reveal that these mothers recognize their family members or friends as support agents rather than professionals. However, they rely on professionals when they review their parental practices. Such results suggest that it is necessary to implement comprehensive support by different agencies. Families and friends can provide emotional support for these mothers. Professionals can help these mothers with providing reliable information on child rearing and help their families to function well. Such comprehensive support is believed to reduce these mother's stress and anxiety.

However, these mothers are reluctant to go professional organization. Therefore, it seems necessary to facilitate easy-access resources such as the Childrearing Support center, nursery schools and kindergartens in the community.

Key word: children with developmental disorders
child care stress
child care anxiety
support
community resouce